

僕は想ふ

Feb 6—Mar 5, 1974

越南日記

夕焼が。メコンの大河を紅く。

染める、そして水は。

滔滔と沈黙に動き行く、

あゝ ベトナム、僕は今。

故郷に帰った、

初めてのベトナムに。

ニョクマムの臭いが。

僕を懐しむ、

そして夜。

熱気の中に訪ずれる。

静寂、

サイゴン
西貢に響き渡るサイレンは。

午前零時、

人人の微笑は。

友愛か。恐れか、

僕はもう。ベトナム、

僕たちの微笑は。

無言の理解、

生きる喜び、

僕は見た、

生きる力、

人間の心、

竹のような人人、

でも今また。

ヘリコプターが空低く。

悲しみを伝える、

僕は起ち。

怒りをこめて祈る、

西貢の真夜中、

見上げれば満月。

戦^{いくさ}は昔に、

少なくとも僕の理解、

皮膚^{はだ}の呼吸は。

日本のベトナムと。

ベトナムのベトナム、

真夜中に啼く。

庭鶏は。

悦びか。 悲しみか、

ひよ子たちは もう。

夜明けを首^ま長っている、

ベトナムを見守る星屑は。

濱邊の砂の数、 南北の。

若き兵士たちの星階位章が。

今こそ空に輝く季節が来た、

だから私は。

歩く、

夜が怖いから。

歩きたい、

土をしっかりと踏みたくても。

歩く、

何も欲しく無くても。

私は また。

あるく、

松葉杖が好きで。

何處までも。

歩いて行きたい、

外に出たら 空氣、

息を吸うと 空氣、

裸の少年は。

何でも 喰う氣、

そして。 僕の心は。

空虚、

子供は遊ぶ、

おもて
外で遊ぶ、

暗くなっても 遊び。

もう絶対に帰ら無い、

新聞賣りの少年は裸足、

僕に来た 云った、

「バウ、バウ (新聞、新聞)」

越南語も読め無い僕は。

ただ首を横に振る、

彼は去り。 またすぐ来た、

指差すは パンたちの食卓に残れり、

僕の出来たことは。

首を縦に振ること、

彼は^{っか}把み。素早く去った、

自分が日本人で。

泣きたかった、

泣いてしまった、

越南の朋を訪ねた、

喜んで呉れて。

コーヒーカップで。

水をくれた、

僕は訪問客であり。

もてなしを飲んだ、



静まりかけた。

道端で。

幾人かの人が。

どこ
床につく、

明日の^{ちから}活力が、欲しい、

喜びの夢が、欲しい、

木陰に佇む老人の。

虚ろな想いは。

過去の夢か、

變り行く祖國の。

おもいで
追憶か、

乾枯らびた。

老婆二人の。

花札遊び、

聲もあげずに。

笑いもなく、

とも。えんぼうよりきたる、

また。たのしからずや、

有朋自遠方來、

不亦樂乎

敬虔なる祈りは。

教會、

祈りは空高く響き、

悲しみの合唱は。

やがて。歡喜の歌聲に。

ロザリオを手に。胸に、

顔に輝きを。涙を、

幾度か苦難を越えて、

人人は。

祈る今日も、祖國を。

平和を、

サイゴンの街並に。

チヨロン軒並に。

翻えるは。黄地に三本の赤線、

羊血を戸口に印すは。

過越しの祭りのイスラエル、

神を畏れてか。

國家權力を恐れてか。

解放戦線の旗は ^{いざこ}何處に、



暗がりの屋上で奏でるギター。

タンバリン。太鼓、

若者と少年と子供たちの歌は。

続く。続く、

時たま爆発する哄笑。

エイ ホイ！ エイ ホイ！ 鋭い掛け聲、

そして最後の歌は。

「螢の光」だった、

誰かが、また。

戦場へ赴^ゆくのか、

蓮の葉が陽の西に傾ぶく午後。

風も無く。 微かに震える水面の。

やがて枯葉が降りて来て。

波紋の草邊にとどきゆく、

寂しい西貢^{サイゴン}の動物園、

と り が と ぶ
コンチーム バアイ、

と り が と ぶ
コンチーム バアイ、

ゆうばえ
夕映の大通りに。

飛び交う小鳥たち、

何が嬉しいの、

何が楽しいの、

と り が と ぶ
コンチーム バアイ、

と り が と ぶ
コンチーム バアイ、

もうすっかり忘れかけていた。

幼いころの時代のとき、

あゝ 僕も。

あれで遊んだ、これで遊んだ、

どんまちゃん。どんちゃんけん。

ぱちんこ。ちゃんばら。



夜の静寂^{しずけさ}を破る銃声は 誰だ、

平和な心^{かきみだ}を掻亂す砲音は 誰だ、

夜、夜中、赤児^{たかな}を昂泣^{たかな}させる警笛は 誰だ、

僕たちの眠りは欲しい、

安穩^{やすらぎ}は欲しい、

徴兵から逃がられる君は。

倅せだ、

僕には金がない、親父がいない、

夜、冷えるのには。

もう慣れているから。

と君は言った、

笑いながら寝入ってしまった、

路上の木陰。

月は遠のく、

Café で働く。

この初老のボーイ、

ワイシャツに蝶ネクタイが。

まぶしい、

釣銭をチップに。

とってしまった、

僕は獨りの 外国人、

彼はここの人で 家族が待つ、

いらしくて。

いらしくて。

僕は出来る事、

美しくとも。

美しくとも。

僕は無力、

あゝ 乙女よ。

祖國を離るるか。

かなた
遙に何を見るのか、



少年たちは半裸で。

ホンダ
自動二輪に又がる、

昼下りの太陽は。

路面を焼き打ち。

シエスタ
昼寝の民草を驚かす、

あゝ若者。

エネルギー
僕たちの爆発は。

大空へとどけ、

私の望むのは。

平和な暮らし、

所得少き欲望を掻きたてるは。

キャピタリズム
資本主義の 悪、

無能。 賄賂。 権力は。

ビュロクラシー
官僚主義の 悪、

老爺じいさんは。

メコンデルタで生まれ育った、

自給自足の農耕は 長閑だった、

戦いくさで焼かれた故郷いなかを去すって。

サイゴンへ 行くさ。

そして今。シクロを踏こぐペダルは重く。

赤銅色の顔に煌めくのは。

汗か。 涙か、

驚いて 彼をみる、

片腕のない。片脚のない、

松葉杖がぶら下げた袋から。

賣る本を出し、僕をのぞく、

瞬時 目を^{そむ}避むけた僕は。

拒否ではなかった。

何だったのか、

それでも^{ほほえ}微笑んで。

^{むな}空虚しく帰りゆく後ろ姿を。

呼び止めたかった、

行ってしまった、

もうすっかり。

歩くことを忘れてしまった、

ホンダさん、スズキさん、カワサキさん。

ヤマハさん。トヨタさん……

私はもっど。

あるきたいのに、



深呼吸が美味しくて。

何度も何度もした、

夜の冷気の中、



あたたかい。

あたたかい。

齢老いた母は 異郷の息子に。

ベトナムの心 ニョクナムを。

歳重にも 歳重にも。

微笑みながら包んでくれる、

齢老いた父は 還らない息子に。

祖國の味 ニョクナムを。

歳重にも 歳重にも。

力をこめて縛りつける、

あたたかい。

あたたかい。

二人の心は ジンジンとどく、

帰り際に 息子にと。

ありあわせの日本の千円札二枚を。

祈るように私に託した、

あたたかすぎて。

あたたかすぎて。

私は何も言えなかった、

心やさしき人人は 人間だった、

心あたたかき人人は 人間だった、

どうして ここには。

こんな人人が いるのか。

不思議に思うような。

僕は 人間だった、

飛びたくても。

飛べない私は 悲しくない、

翼をもって生まれた君は。

飛んでおくれ、

私はここで生まれたけれど。

私はここで死んだとしても。

ちっとも悲しくないから。

君は飛んでおくれ、

人間があまりにも人間すぎて。

僕はもう。

死んでもいいほど嬉しかった、

ベトナムの日日、

ベトナムの人々、